

IIAS「ゲーテの会」ブックレット  
(VOL.01003)

近代科学はこのままでいいのか  
－ゲーテが描くもう一つの近代－

(思想・文学分野)

現代に甦ったゲーテとエッカーマンが  
FUKUSHIMA について語る

公益財団法人国際高等研究所  
<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト

本ブックレットは、2013年10月19日開催の第3回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。

※本ブックレットの無断転載・複写を禁じます。ただし、個人としてのご利用の範囲内であれば、コピーしてご利用いただけます。

近代科学はこのままでいいのか

－ ゲーテが描くもう一つの近代 －

## 現代に甦ったゲーテとエッカーマンが FUKUSHIMA について語る

ゲーテの詩「魔法使いの弟子」を読み解きながら、「現代に甦ったゲーテ」が FUKUSHIMA について、また原発に代わる動力源としてドイツで導入されている「風力発電」や「菜の花栽培」について語る。

京都大学名誉教授・平安女学院大学教授の高橋義人先生がゲーテ役を、また平成 24 年度日本学術振興会「育志賞」に輝く気鋭のドイツ思想研究者、神戸大学人文学研究科講師の久山雄甫先生がエッカーマン役を務める。

### 高橋 義人 (Yoshito TAKAHASHI)

1945 年栃木県生まれ。京都大学名誉教授、平安女学院大学教授。Internationale Goethe-Gesellschaft(国際ゲーテ協会)理事、日本ゲーテ協会理事、日本学術振興会専門委員、けいはんな学研都市・町づくり専門委員等を歴任。現在、日本学術会議連携会員、Gesellschaft für international Germanistik(国際異文化交流独文学会)副会長。



主著に『形態と象徴』(岩波書店)、『ドイツ人のこころ』(岩波新書)、『魔女とヨーロッパ』(岩波書店)、『グノーシス 異端と近代』(共著、岩波書店)、『グリム童話の世界』(岩波新書)、『10 代のための古典名句名言』(共著、岩波ジュニア文庫)、ゲーテ『色彩論 完訳版』(共訳、工作舎)などがある。

### 久山 雄甫 (Yuhō HISAYAMA)

1982 年生まれ。神戸大学人文学研究科講師。

ダルムシュタット哲学実践研究所研究員、日本学術振興会特別研究員、京都女子大学非常勤講師を経て現職。

専門はドイツ思想史、日欧文化比較論。平成 24 年日本学術振興会「育志賞」受賞。



## 目次

はじめに

I 日本人は何を悩んでいるのか

II 科学はなぜ人間を危機に陥れたのか

III 「自然に反した科学」と「自然に即した科学」

2013年10月19日開催

第3回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：現代に甦ったゲーテとエッカーマンが FUKUSHIMA について語る

講演者：高橋 義人（平安女学院大学教授、京都大学名誉教授）

久山 雄甫（神戸大学人文学研究科講師）

（文中敬称略）

はじめに

高橋：「ゲーテの会」第1回目で、私の部屋にゲーテの霊が出てきて、私の肩越しに私の原稿を見ながらダメ出しをするという話をした。同じように、ゲーテとエッカーマンが今の日本にいて、東日本大震災と FUKUSHIMA を見たら、どう言うだろうか。それは、現代日本版のエッカーマン『ゲーテとの対話』になるだろう。そう考えて、新しいゲーテとエッカーマンの対話を構想した。僭越ながら私がゲーテを演じ、私のかつての教え子でもある久山先生にエッカーマンの役を演じていただくことにした。それが、今回のテーマ「現代に甦ったゲーテとエッカーマンが FUKUSHIMA について語る」の趣旨である。

――（以下、ゲーテ（高橋氏）とエッカーマン（久山氏）の会話）

Ⅰ 日本人はいったい何を悩んでいるのか

ゲーテ：エッカーマン君。君もそうだろうが、あの世から見ているとこの世、つまりこの人間世界の愚かさがよく見えるね。

エッカーマン：はい、ゲーテさん。しかし、今私たちがいるあの世というのは、天国なのでしょうか、それとも地獄なのでしょうか。

ゲーテ：いや、そのどちらでもないね。私は『ファウスト』第二部の最後で、主人公が天国に昇って救済される場面を描いたけれども、あれはキリスト教との妥協だよ。君も気づいていたと思うが、私はキリスト教の原罪の処女降誕も復活も信じていなかった。もちろん、悪魔の存在も魔女の存在も信じてはいなかったよ。そんな私が天国に昇って天使たちと暮らすなんていうおとぎ話を信じていたはずがないだろう。

エッカーマン：天国も地獄もないとすると、今私たちはいったいどこにいるのでしょうか。

ゲーテ：まあ、あの世には違いはないさ。しかし、それは天国でも地獄でもないんだ。現に

今われわれが見ている日本人は、ヨーロッパ人とは違い、あの世を垂直方向においてではなく、水平方向において捉えている。しかも、日本は海に囲まれているから、海の彼方に浄土、つまり彼らの考える天国があると言うんだ。

エッカーマン：なるほど、垂直方向ではなく、水平方向。というと、私たちは日本人の言う浄土にいるとお考えですか。

ゲーテ：いや、それも違うね。だって僕らは今、京都にいるじゃないか。

エッカーマン：まるで、あの世にいながら、この世にいるといった感じですね。

ゲーテ：ああ、そうだね。それを日本人は誠に上手く表現しているよ。「草葉の陰にいる」って言うんだね。

エッカーマン：それでは、いったい私たちはどこの「草葉の陰」にいるとお考えですか。

ゲーテ：日本の京都だよ。京都にいる高橋義人と久山雄甫という人たちが、うれしいことにわしの思想を勉強してくれているんだ。彼らをはじめとして、日本人は今、わしの『ファウスト』第一部の冒頭で描いた主人公のように悩んでいる。そして、わしに向かってハムレットのように「To be or not to be, that is the question.」と問いかけてくるんだよ。

エッカーマン：日本人の多くはいま暗い顔つきをしています、彼らはいったい何を悩んでいるんですか。

ゲーテ：2011年3月11日に日本の東北地方で大地震が起きた。マグニチュード9.0という日本近辺で起きたなかでは史上最大の地震さ。それは君も知っているだろう。それによる莫大な被害のことで悩んでいるんだよ。わしは34歳の時にヴァイマルにいて、遠いイタリアのメッシーナで起きたか起きようとしている地震を感知することができた<sup>1</sup>、それから4年後にはシチリアで、焼け野が原のようになり、人々がまだバラック住まいをしている被災地メッシーナを訪れた<sup>2</sup>。わしが東日本大地震も予知してあげられていたらよかったと思うがね。そうすれば18,550人もの犠牲者を出さなくても済んだのかもしれない。

---

<sup>1</sup> Johann Peter Eckermann: Gespräche mit Goethe. 13.11.1823. FA II-12, S.71f.

<sup>2</sup> Goethe: Italienische Reise. 10.5.1787. FA. I-15-1, S.323f.

エッカーマン：そう言えば、ゲーテさん。あなたは晩年まで書き続けられた『ファウスト』第二部でも地震について書いておられましたね。

ゲーテ：いや、あれは地震のことではなくて、火成論と水成論の論争だよ。わしが生きていた頃には、地球ができたのは火山の爆発によってだったのか、それとも水の浸食作用によってだったのか、そういう議論が盛んだった。わしはその議論、その論争を調停したかったんだ。

エッカーマン：調停と仰いましたが、私は、ゲーテさんは水成論の方に肩入れされているのではないかという風に思っていたんですけども。

ゲーテ：いや、そう言っても間違いではないな。わしが死んだ後のことだがね。プレートテクトニクス理論というのが発表された。地球の表面は陸地と海からできているだろう。海の底にも陸地がある。この陸地は固体で動かせないと皆思っているが、じつは陸地も粘っこい液体みたいに流れているというのが、プレートテクトニクス理論なんだ。しかも地球の内部にはマグマという火の塊があって、プレートが沈み込むとマグマが活性化し、火山を爆発させる。地震もプレートとプレートのズレから生じる。そして、今度の東日本大震災では、この地震によって海の水も激しく動き出したんだ。それが津波さ。今回の大震災では揺れによる建物の倒壊よりも津波による被害のほうがはるかに大きかったんだ。

エッカーマン：それによって 2 万人近くもの多数の犠牲者が出ってしまったわけですね。日本人が悩んでいるのもその問題ですか。

ゲーテ：それよりも恐ろしい問題だよ。地震や津波は自然の力が引き起こしたことだから、まあ仕方がないだろう。ところが、この地震と津波によって福島にあった原子力発電所の施設が大きく破壊され、放射能がいっぱい撒き散らされて東日本一帯を汚染してしまった。1783 年のシチリア島地震の被害も大変だったが、福島の被害はこれから先とても長く続くだろうね。

エッカーマン：放射能というのは、プルトニウムなどの元素が崩壊する時に放出される毒ガスのようなもので、しかも被曝したときには痛いとも何とも感じない。けれども、それが元で後になって白血病になったり、癌になったり、生まれてくる子どもたちに影響が出たりするというものですよね。プルトニウムなんていう物質、私たちが生きていた頃にはあったでしょうか。

ゲーテ：いや、なかったよ。プルトニウムは自然界にはほとんど存在しない。これは人間が作り出したようなものなんだよ。

エッカーマン：しかし、どうしてそのような恐ろしいものを人間は作り出してしまったのでしょうか。

ゲーテ：高橋君がわしに尋ねているのはその点だよ。わしはかつてこう書いたことがある。

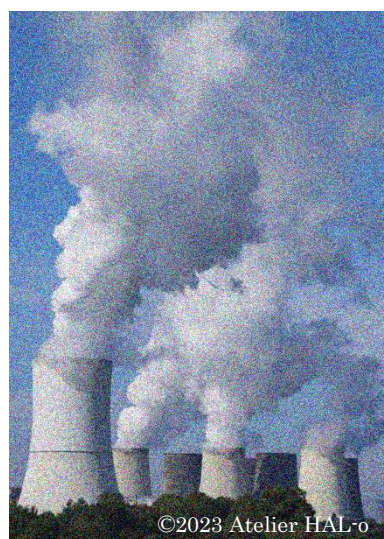
経験を積みれば積むほど、われわれは探究しがたいものに近づく。経験を利用することを知れば知るほど、探究しがたいものは実用的な価値のないことがわかる。

思索する人間の最高の幸福は、探究できるものを探究しつくし、探究しがたいものを静かに敬うことである。 (『箴言と省察』FA I-13, S.240)

科学者には探究できるものを探求し、探究しがたいものを静かに敬いつづけてほしかったんだが、わしらの死後、彼らは探究しがたいものまで探究し、ついには原子力を作り出してしまった。今にして思えば、「探究できるものを探究しつくし、探究しがたいものを静かに敬う」と記すだけでなく、もう一歩進めて、「探究しがたいもの、探究してはならないものを静かに敬う」ことが大事だ、と記すべきだったかもしれない。

エッカーマン：探究してならないものを探究するとは、パンドラの箱を開けてしまうということですか。

ゲーテ：うまいことを言うね。そうだ。それが、わしがニュートン一派の連中に対して感じていた強い不安だった。あいつらは科学者としての名声を得ることばかり考える。「探究しがたいものを静かに敬う」どころか、探究しがたいものを解明することが自然科学者の任務だと思い込む。その結果、自然を破壊し、人間を危機に陥れてしまったんだ。パンドラはヘシオドスが作った話だ。パンドラは世界最初の女性で、女性が生まれたために世界には不幸がまき散らされた。悪や不幸の源は女性であるというのがヘシオドスの考えだ。しかしわしはそうは思わないな。女性には、男性にないすばらしいところ、美しいと



原子力発電所 (イメージ)



ころがある。ヘシオドスにはそれが見えなかった。わしだったら、「パンドラの箱」ではなく、「錬金術の箱」とでも名づけるところだね。

エッカーマン：錬金術って、卑金属から金を作り出すことでしょう。それがパンドラの箱のように、開けてはならない箱だとおっしゃるんですか。

ゲーテ：そうだよ、科学には開けてはならない箱があるんだ。探究しがたいもの、探究してはならないものを探究するのが、禁じられた箱を開けることだ。科学史を見てごらん。禁じられた箱を開けた例がたくさん見つかるよ。錬金術はその典型だ。卑金属から金を作り出すことなんかできないが、そのうちできるようになるかもしれないと思っている連中がたくさんいる。同じように、無機物から有機物を作り出し、非生命から生命を作り出すことがそのうちできるだろうと思っている連中もたくさんいる。試験管ベイビー、人造人間、ゲノム編集なんて全部、禁じられた錬金術の箱に属するものなんだ。原子力も禁じられた箱に入っていたもののひとつだ。だが、そいつを20世紀前半の人々は取り出してしまった。禁じられたものを取り出せば、パンドラの箱のギリシア神話が説いているように、世の中にありとあらゆる災厄が起きることは明白だよ。

## II 科学はなぜ人間を危機に陥れたのか

エッカーマン：あなたは自然科学者のことをずいぶん批判されますけれども、彼らは彼らなりに人類の幸福を考え、自分たちは人類の進歩に寄与していると考えていたんじゃないですか。

ゲーテ：そうだよ。君の言う通りだよ。そしてそこが厄介な問題なんだ。わしは前に『主観と客観の媒介としての実験』という論文のなかでこう書いたことがある。

すでに見てきたように、孤立した事実を自分の思考力や判断力と直接に結びつけようとした人々が真っ先に誤謬を犯したのである。それに対してたったひとつの実験のありとあらゆる側面や様相を、あらゆる可能性において検討し、研究することを怠らなかった人々こそ、最もよい成果をあげることができたのだと言えよう。 (「主観と客観の媒介としての実験」FA I-25, S.33)

君もすでに分かっていると思うがね。「孤立した事実を自分の思考力や判断力と直接に結びつけようとした人々」とは、もちろんニュートン一派のことを指している。そして原子力発電を始めた人々もそれと変わらない。彼らは原子力発電のよい

面しか見ようとしな。それに対して、原子力発電のありとあらゆる側面や様相をあらゆる可能性において検討し、研究していれば、今回の福島のような事故が起きたらどうなるか、放射性廃棄物をどうすべきか、前もときちんと準備しておくことができたろう。そして、そうやって考えていれば、原子力発電なんて長い目で見たら経済的にもペイしないし、それどころかその廃棄物が人類をいつまでも苦しませつづけるということがすぐに分かったはずだよ。

エッカーマン：原子力発電を推進していた人々は、これは大気を汚染しないクリーンな発電だと言っているんですけども、それは嘘だったとお考えですか。

ゲーテ：大嘘だよ。何がクリーンなものかね。今度のような事故が起きたら放射能があたり一帯に撒き散らされる。1986年に旧ソ連のチェルノブイリ原子力発電所で起きた事故のため、長期的に見ると数十万人～数百万人が死亡することになるだろう、と言われている。わたしが住んでいたドイツのヴァイマルでも、今ではもうキノコが食べられなくなってしまうている。日本人がマツタケを好きなように、わしもドイツのマツタケとも言うべきシュタインピルツが大好物だったが、あれはもうドイツでもフランスでも食べられなくなっているんだ。

エッカーマン：シュタインピルツってイタリアのポルチーニのことですね。

ゲーテ：そうだよ。しかも原子力発電には、事故が起きなくても困る問題があるんだ。君は家内制手工業から工場制機械工業への変化を知っているだろう。

エッカーマン：知っていますよ。あれは後に産業革命と呼ばれるようになったものです。あなたの晩年に起きた社会の大変化ですね。私は、ゲーテさんが亡くなられた後もしばらく生きておりましたので、産業革命の惨状というものをもっと見てまいりました。産業革命では石炭を動力源に使っていたので、そこから出る煙によって大気汚染が進み、さらには工場から出る排水のために川の魚がどんどん死んで、魚が水面にプカプカと浮いているのをよく見たものです。しかしまあ、それはドイツよりイギリスの方がひどかったそうですが。

ゲーテ：そうなんだ。そこが問題なんだ。皆、エネルギーの供給のことばかり考えているが、そのエネルギーを使って出たゴミをどう処分するか、少しも考えてこなかったんだ。僕たちは口から食物を摂り、お尻から排泄物を出すだろう。食物を手に入れることはみな考えるけれど、排泄物をどうするかは考えない。それで、わたしがいた頃のヨーロッパでは、みな、窓から通りに排泄物を捨てていたね。通りがまる

でトイレだったんだ。

エッカーマン：そうですね。そう言えば私も何度かひどい目に遭いました。ヴァイマルの街を歩いていたら、上から排泄物が降ってきて私の頭に命中したんです。

ゲーテ：ハハハハハ。それは気の毒だったな。ちゃんと帽子をかぶっていたかね。でも、ああいふひどいことは日本にはなかったんだ。窓から通りに糞尿を捨てるのは、ヨーロッパの悪くて長い慣習だね。もう今ではなくなっただけがね。日本では昔から糞尿を畑の肥料として使ってきた。そのため窓から糞尿を捨てなくてもよかったんだ。これは素晴らしい循環システムだよ。かつてわしは「エピレマ」という詩の中でこううたったことがある。

そうだ 自然の観察に際しては 「一と全」とに眼を注げ 内にあるものもなければ 外にあるものもない 内がそのまま外なのだ （「エピレマ」FA I-2, S.498）
---

窓から通りに糞尿を投げ捨てるのは、家が内、通りが外という意識があるからだろう。ところが日本では、内がそのまま外、外がそのまま内だから、糞尿だって再利用して循環させることができたんだ。そういう循環システムを知りながら、日本人はどうして原子力発電なんかに手を出したのか、まったく理解に苦しむね。

エッカーマン：循環システムがいいのであれば、原子力発電のゴミも再利用できないんですか。

ゲーテ：それができたら簡単だよ。原子力発電のゴミには高レベル放射性廃棄物と低レベル放射性廃棄物があって、低レベル放射性廃棄物のほうはリサイクルがいろいろと考えられているが、高レベル放射性廃棄物のほうは捨てるしかない。あれは内と外がひとつという考えが適用できないもの、循環できないもののひとつなんだ。

エッカーマン：捨てるしかないというお考えでしたら、その捨て先はたとえば海になるんですか。

ゲーテ：昔はアメリカでもソ連でも、いや日本でもそうだが、放射性廃棄物を海に捨てていた。しかし、そんなことをすると魚が放射能という毒に汚染されてしまうだろう。そして、その魚を食べた人間の体内にまで毒が入り込んでしまうだろう。だから放

放射性廃棄物の海洋投棄は今では国際条約で禁じられているんだよ。

エッカーマン：それでは、地中深くに埋めるという考えについては、どう思われますか。

ゲーテ：いや君、放射能のゴミがどれくらいの期間で消えると思っているのかね。

エッカーマン：そうですね。1000年くらいだと。

ゲーテ：いや、1000年で毒性が無くなるのは放射性ゴミの成分のごく一部だよ。特にネプツニウムという一番厄介な成分は、毒性が半分減るまで210万年かかる。210年じゃないよ、210万年だ。ほぼ完全に消えるには1000万年、1000年ではなくて1000万年もかかるんだ。

エッカーマン：もちろん、その間には火山の爆発や地震なんかも起こるんでしょうね。

ゲーテ：そうだよ。地震や地殻変動によって、地中深く埋められた放射性のゴミが突如として地表に出てきてしまわないともかぎらない。

エッカーマン：そんなにどうしようもないものだとすると、原子力発電を始めた国々はみな困っているんじゃないでしょうか。



核廃棄物の恐怖（イメージ）

ゲーテ：そうだよ。そこでわしらがいたドイツには今メルケル首相というのがいて、原子力発電を止めることにしたんだ。なかなか英明な首相だね。しかし、他の国々は止めたくても、止めるとはなかなか決断できないでいるんだ。

エッカーマン：ゲーテさん、あなたは以前「魔法使いの弟子」というバラードを書かれましたが、あの頃すでに、科学技術が進みすぎて、止めることができなくなるという事態が起きることまで予想されておられたのですか。

ゲーテ：いや、そこまでは分からなかったよ。もともと「魔法使いの弟子」というバラード

ドはフランス革命をからかって作った詩だった。一部の民衆たちの暴動が大きくなって、止まらなくなるという話だったんだ。ところが、その後、産業革命とも呼ばれる機械産業が発展するとともに、技術が独り歩きし、機械の制御の仕方が分からなくなった。そういう時代を風刺したものとして、この詩はあちこちでもてはやされるようになったんだ。

エッカーマン：「魔法使いの弟子」というのは、私たちの死後、音楽にもなりました。レーヴェが作曲したドイツ・リートはあなたもご存じでしょう。今の時代に有名なのは、フランス人のデュカスが19世紀の末に作曲した交響詩「魔法使いの弟子」ですね。この曲を使ってアメリカのウォルト・ディズニーは映画『ファンタジア』で、あなたの「魔法使いの弟子」をアニメーション化しています。

ゲーテ：アニメとは面白いね。それでは、デュカスの交響詩かディズニー映画をちょっと披露してくれないかね。

エッカーマン：それでは、デュカスの交響詩「魔法使いの弟子」をCDで用意していますので、お聞かせしましょうか。

ゲーテ：お願いしたいね。でもその前に、詩を読んでみようか。魔法使いの弟子が魔法を使って箒に水汲みをさせる。浴槽はじきに一杯になったが、魔法使いの弟子には止め方が分からない。やめろ、やめろというのに、箒は水汲みをつづけ、しまいには家中が水浸しになってしまう。そこによく師匠が戻ってきて、事態を收拾するという話だよ。

~~~~~

### 魔法使いの弟子

やっとうかけたぞ  
魔法使のおいぼれ先生！  
下男の霊たちよ 今日だけは  
おいらの意のままに動くんだぞ！  
先生の呪いも身ぶりも手口も  
ちゃんと見ておいたさ  
弟子のおいらも念力こめて  
立派に奇蹟を成就してみせるぞ

湧き出よ 湧き出よ  
次から次と  
言われた通りに  
水よ湧き出よ  
風呂浴びできるよう  
たんまり たっぷり湧き出るんじゃ

さあ今度はおいぼれ箒の登場さ  
見すばらしいなりをして  
お前は前からずっとわが家の下男  
今日は俺の意のままに働けよ  
二本足で立ってみろ  
その上には頭を載せるんだ  
急ぐんだ 手桶を持って  
さっさと水を汲んでこい

湧き出よ 湧き出よ  
次から次と  
言われた通りに  
水よ湧き出よ  
水浴びできるよう  
たんまり たっぷり湧き出るんじゃ

ほら見ろ もう岸まで下りていった  
やったぞもう川の水を汲んでいる  
あっという間に戻ってきて  
さっさと水を注ぐ  
さあ これでもう二回目だ  
たらいの水がどんどん増えてくる  
あの甕もこの甕も  
水でいっぱいさ

やめろ やめろ  
お前ができるということは  
もう十分わかった  
これでお終いだ

しまった ああ どうしよう  
やめる呪いを忘れてしまった

箒を元に戻すあの呪い  
そいつを忘れてしまった  
箒は行っては返し 水を運んでくる  
箒よ おいぼれ箒に戻れ！  
もういい 次から次に  
もう運ばなくてもいい  
大変だ あっちにも流れ こっちにも流れ  
どんどん溢れてくるぞ

ダメだ ダメだ これ以上  
放っておけない  
箒をつかまえよう  
この不埒な奴め  
だが 何やらこわくなってきた  
何という顔付きか 何という眼つきか

この地獄の生まれそこないめ  
家中を水びたしにする気か  
敷居からも敷居からも ひたひたと  
水が入り込んでくるじゃないか  
言うことを聞こうとしない  
この不埒な箒の馬鹿野郎め  
杖すがたの箒に戻れ  
水汲みはもうやめろ！

おいらがこんなに言っても  
お前はまだやめぬのか  
お前を取っつかまえるぞ  
お前を羽交いじめにするぞ  
おいぼれ箒め この鋭い斧で  
お前を二つに叩き割ってしまうぞ

さあ 箒が戻ってきた 水を運んできたぞ

小さいお前を取っつかまえ  
押し倒してしまうんだ  
バキッといったぞ 鋭く当たったぞ  
やったぞ 見事に当たったぞ  
ほらみろ 一刀両断だ  
やっと懸念は去った  
これでひと息つけるぞ

いかん しまった  
叩き割ったのが二本になって  
すっくと立ちあがり  
二人の下男になって  
またもや仕事を始め出す  
お助け お助け 魔法使いの先生方！



二本の箒は駆けずりまわる  
広間も階段も いたるところがびっしょびっしょ  
なんと恐ろしい水びたし  
魔法使いの先生方 どうか助けてくださいな  
あっ 先生がやっと帰ってきた  
先生 どうにもどうにもなりませぬ  
おいらの呼び出した霊たちを  
消すことがどうしてもできません

「箒よ 箒よ  
お前たちがいた  
部屋の片隅に戻るがよい  
お前たちを霊として呼び出すのは  
用があるときのみじゃ  
呼び出すのは おいぼれの吾が輩だけじゃ」 (FA I-2, S.141ff.)

~~~~~

エッカーマン：今ごろになって、あなたの「魔法使いの弟子」が日本で大変な評判になっています。



ゲーテ：そりゃまたなぜかね。

エッカーマン：福島原発事故のせいですよ。事故で壊れた原子炉は廃炉にしなければなりません、これは魔法使いの弟子のお師匠さんだって簡単にはできません。あなたの詩に出てくる箒と同じように、原子炉は「やめろ」と言っても止まらないんです。事故で原子炉内の核燃料は溶けてしまいました。でもいまだに途轍もなく熱いんです。こやつを冷やすため、毎日3日、400トンもの水をかけて必死に冷やしているんです。でも、魔法使いの弟子がいくら頑張っても箒を止められなかったように、核燃料もちっとも冷めてくれません。核燃料や放射性廃棄物は、「魔法使いの弟子」に出てくる箒そのものですよ。核燃料に毎日注いでいる400トンの水がどれくらいの量か、お分かりですか。

ゲーテ：この部屋いっぱいくらいかね。

エッカーマン：そうです。大体それくらいです。25メートルプールひとつくらいですね。

ゲーテ：そうだと、汚染水で満たされた25メートルプールが毎日ひとつずつ増えてゆくわけか。

エッカーマン：このままだと、福島県全体が汚染水タンクで埋め尽くされてしまいますね。

ゲーテ：魔法使いの弟子が水を止めたくなくなったのと同じように、どうにかして止めたいと思うだろうね。

エッカーマン：しかも汚染水はタンクから外に漏れだしているんですよ。

ゲーテ：しかし安倍首相がオリンピック東京招致のための公式の席で、「汚染水は発電所の港湾内の0.3平方キロメートル内に完全にブロックされている。全体として状況はコントロールされている」と言っていたじゃないか。

エッカーマン：完全にブロックされているなんて、本当に信じられますか。福島県知事だって、汚染水はいまだに漏れていると言って抗議していたじゃないですか。

### III 「自然に反した科学」と「自然に即した科学」

ゲーテ：聞けば聞くほど、原子力発電はやめなければならんという思いが強まってくるな。

あれは「自然に反した」システムだよ。わしが自然科学研究を進めていったとき、わしがしようとしていた自然科学とは全然別の自然科学をニュートン一派が目指しているのに気づき、彼らの科学を「自然に反した科学」(naturwidrig な科学)、わしらの科学を「自然に即した科学」(naturgemäß な科学)と呼んだ。「自然に反した科学」とは、探究しがたいもの、探究してはならないものを静かに敬うことを忘れた科学のことだ。でも時代は残念ながら「自然に反した科学」のほうにより傾いていった。もしそんな科学がますます盛んになったら、地球は滅びてしまうだろう。そう憂慮して、わしは『色彩論』全3巻を必死に書いた。『色彩論』をわしは『ファウスト』よりも重要な作品だと思った。本当だよ。だってあの本が受け入れられなければ、地球は滅茶苦茶になってしまうことがよく分かっていたんだからね。

エッカーマン：あなたの予言が不幸にも的中し、日本は滅茶苦茶になってしまったんですね。

ゲーテ：どうにかして日本を救ってあげられないものかね。

エッカーマン：宮崎駿<sup>はやお</sup>というアニメ映画監督が『風の谷のナウシカ』という漫画と映画をつくっています。

ゲーテ：宮崎駿のことは聞いたことがある。『風の谷のナウシカ』は、地球が一部を残してほぼ滅びてしまった千年も先の時代の話だろう。

エッカーマン：そうです。人類の社会は核戦争で「風の谷」を残してほとんど滅んでしまった。「風の谷」以外のところは、放射能か何か分かりませんが、毒性の強いガスに覆われ、「腐海」と呼ばれる腐った海と腐った陸地ばかりになってしまった。毒ガスばかりの腐った地球を清い土地に戻さなければならない。それが『風の谷のナウシカ』のテーマです。

ゲーテ：腐った地球を清く戻すなんて、いったい誰にできるのかね。

エッカーマン：人間ではありません。王蟲（オーム）という巨大な虫と、腐海の自浄作用によって、地球は救われるのです。

ゲーテ：自然のもつ自浄作用か。たしかに自然には自浄作用がある。わしは前に気象学に関する論文のなかで次のように書いたことがある。

~~~~~

こうして色々と考案をめぐらしてきたが、そのなかでも最も素晴らしいものは、自然がそれ自体のなかに法や規則として持っているものによって、法も抑制も知らない四大を圧倒してしまうことはできないだろうかと気づいたことである。この点について、われわれはどんなに多くの知識をかち得てきたことであろうか。だがここではごく身近なものだけを想起してみればよい。

地球の引力が強いときには、気圧計が上昇していることによってそれがわかるが、これこそは大気の状態を制御し、四大にも一定の目的を与え、また水分が過剰に作られたり、風が激しく動いたりしないように配慮してくれるものにほかならない。空気中の電気があたかも中和したかのように標準状態を示すのも、この力のためである。

これに対して気圧計が下降しているときには、四大は軛から解き放たれている。この場合なによりも注目しなければならないのは、ヨーロッパ大陸の下層の大気には、西から東へ流れていこうとする傾向があることである。湿気も豪雨も、海の小波も大波も、すべては、あるいは静かに、あるいは嵐のように、東に向って動いてゆくし、たとえこれらの現象が途中で起ったとしても、それはすでに最初から東進しようとする傾向を秘めている。

(「気象学詩論 1825」FA I-25, S.296)

~~~~~

ゲーテ：自然のなかには一定の法がある。しかしプルトニウムは人間が作り出したに等しいもので、残念なことに、そこにまで自然の法は及ばない。チェルノブイリも福島も、『風の谷のナウシカ』の腐海と同じようにいずれは浄化されるだろう。しかしそれには千年では足りない、何十年か何百万年という月日が必要だ。そしてその頃にはもう人類は存在しないだろう。そうわしは確信しているよ。

発行日	2023年11月30日
講演著者	高橋 義人 久山 雄甫
編集発行	公益財団法人 国際高等研究所 <「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局
編集協力	アトリエアロ 大仲佐代子

ISSN 2759-0577



満月に照らされて浮かぶ「ゲエテ」の胸像  
(国際高等研究所庭園)